

# れきし 散歩

## 山の神が移動する日？ ～市内の山の神信仰～

### 山の神とは？

市内では、山の神は山仕事や農業にご利益がある神様として広く信仰されてきました。ご神体は「山神」と彫られた石塔であることが多く、現在でも集落・講・個人などの単位で山の神をまつり、祭日に行事を行っているところがあります。



山の神の石塔(住山町)

### 山の神の祭日

市内における山の神の祭日は、年1回か2回で、年1回の場合は1月7日、年2回の場合は1月7日(または2月7日)と12月7日が一般的です。ただ、近年では平日に行事を行うことが難しいことから、祭日に近い日曜日などに変更するところもあります。

### 山の神行事 いろいろ

山の神の祭日には、早朝や夜に山の神の前で



山の神行事(下庄町)

焚き火をたき、供物を供えてお参りした後、供物のお下がり焚き火で焼いて食べます。主な供物はシラモチ(うるち米を粉にして水を混ぜてこねたもの)・餅・赤飯です。また、山の神の焚き火で焼いたシラモチや餅を食べると「病気をしない」と言い伝えられています。

三寺町では、12月6日の山の神行事で「天筆」を準備します。「天筆」とは、細切りの半紙に「天筆和合楽千福円満楽秋樹千年之緑山之神祭礼高く上れ」などと書いたもので、それを山の神の焚き火にくべて、高く舞



天筆(三寺町)

い上がると「字がうまくなる」と言われています。

関町市瀬では、1月3日に山の神の前で焚き火をたき、その火で餅を焼いて食べる行事が行われています。以前は、山の神のそばの2本の樹木の間大きな注連縄を張り、その注連縄に雑木の又になった部分で作ったカギをかけて引っ張るカギヒキの行事がありました。カギヒキの時には「やーまのかーみのかんじ(勸進)、早稲もよかる、中稲もよかる、晩稲もよかる、わっしょい、わっしょい」とはやしていました。

### 山の神が移動する日

市内には「山の神は山と田を行き来する」という言い伝えがあります。例えば、2月と12月の7日が祭日である下庄町では、「山の神は2月7日に山から田に降りて田を守り、12月7日に田から山へ帰って山を守る」と言われています。このような言い伝えは何を意味するのでしょうか。地域の方々にお話を伺ってみると、2月は山仕事から稲作へ、12月は稲作から山仕事へと人々の生活が移り変わる時期に当たっていたということでした。つまり、山の神は人と同じサイクルで移動していたということになります。いかに人々と山の神が密接な関係にあったかということがよく分かります。

### おわりに

先にご紹介した通り、近年は山の神の祭日も変わってきています。確かに従来からの祭日を守ることも大切です。しかし、祭日を守ることで行事ができなくなるのであれば、現在の生活に合わせて祭日を変えることも一つの伝承の仕方と言えるでしょう。生活の中で里山や稲作との関係が失われつつある現在、山の神は人々と自然をつなぐ重要な役割を持っているのかもしれない。

<参考文献> 亀山市史民俗編ウェブ版(2011年)